平成１９年度　お茶の水女子大学経営協議会（第３回）議事録

日　　時：平成２０年1月２８日（月）１５：００～１７：１５
場　　所：本学本館２階　第一会議室（２１３室）
出 席 者：（学外委員）足立委員、阿部委員、池田委員、江澤委員、北村委員、關委員
（学内委員）郷学長、和田理事、柴田理事、三浦理事、内田理事、羽入副学長、通山副学長
陪 席 者：桐村監事、山田監事、塩満学長特別補佐、石口総務室長、益田財務室長

１．前回〔平成１９年１０月２４日（水)〕議事録（案）の確認

修正等がある場合は、平成２０年２月４日（月）までに、企画チームまで連絡することとした。

２．学長挨拶

学長より、机上配布資料に基づき、年頭の挨拶があった。

３．報告事項

（１）国立大学協会臨時学長等懇談会(19.12.26 開催)について

〇学長より、国立大学協会臨時学長等懇談会(19.12.26 開催)について、【資料３】に基づき、平成２０年度の国立大学運営費交付金が大幅に減額されたこと、政策課題対応型の経費が新たに支援されたこと、および学部の定員超過を抑制する仕組みが設けられたこと等の報告があった。

（２）教育再生会議　第三次報告について

〇学長より、「教育再生会議　第三次報告」について、【資料４】に基づき、「大学発教育支援コンソーシアム」を推進すること、大学・大学院教育の充実と成績評価の厳格化により、卒業者の質を担保すること、学長リーダーシップによる、学部の壁を越えたマネジメント改革を推進すること、「国際化」「地域再生」に貢献すること、大学・大学院の適正評価と高等教育への充実した投資をすること等の提言があった旨報告があった。

■　主な議論は以下のとおり。≪☆学外委員からの意見、★大学側からの発言≫

☆学長選挙を廃止するということに関しては、ややセンセーショナルというか、ドラスチックに書かせていただいているわけだが、体制として、外の目から見ていると、やはり学長選挙、あるいは学部長選挙に、大学全体のガバナンスの問題が深く根差しているのではなかろうかと考えている。そういったものを、何か新しい視点で考え、新しい大学の自治といったものを考えていただく必要があるのではなかろうかということで、このような提言をさせていただいた。

確かに、学長選考委員会といっても、これは難しい状況で、世界の大学を見ても、これが理想であるにしても、必ずしも、現実的にそうなっていない面も色々とある。今のような学長、学部長選挙とは違った形で、各大学が、何か違った形の検討というか、トライをしていただくことができないだろうかということである。一律に、このような形が良いという提言ではない。一石を投じさせていただいているということである。

それから、リベラルアーツに関しては、大変先進的な取組みを始められるということで、これは大変素晴らしいことであると思う。またこれは、入試の在り方そのものに関わってくるわけであるが、高校を出て、大学を志望する段階において、既にメジャーまで決めてしまうというシステムが、必ずしも今日の社会現象の中から、あるいは社会から、あるいは、企業サイドからも、必ずしもフィットしているわけではない。

むしろ、学部共通のところで、リベラルアーツという切り口で入学していただき、そして２年次の後半くらいから、学部あるいは学科といったものを専攻するというようなことが、これからの時代にふさわしいのではなかろうかという、これも提言であるわけだが、なかなか難しいとは考えている。

たまたま私は、私立ではあるが、ＩＣＵの理事もしており、いよいよＩＣＵは、先んじてそういうものに取り組むような形になっている。その結果がどうなるか、その評価も見ていただきながら、貴学もこの取組みについてご検討いただければ、大変ありがたいと考えている。

そのような流れの中で、逆に、９月入学ということについても、グローバルという観点から考えれば、大変重要になってきているような気がしてならないし、学費の問題があったり、非常に経営的な問題にも関わってくることなので、これはなかなか簡単には導入できないかもしれないが、この９月入学の中で、グローバル性ということと、もう１つは、入学までの６ヵ月間において、何か奉仕活動を行うとか、あるいは世界を旅行して見聞を広めてもらうとか、違った観点での過ごし方をしてもらう必要があるのではなかろうか。

奉仕活動的なものを義務付けるということは、なかなか困難であろうが、このようなことを大学側が受け入れる条件にしていただければ、ここ(報告書)には書いてないが、ありがたいと考えている。９月入学については、そのような議論もあったわけである。

断片的ではあるが、今のような問題意識を持って、これを提言させていただいたわけで、非常に突出したところもあるかもしれないが、そこのところはご理解いただき、何か取り組めるようなものがあれば、大変ありがたいと考えている。

★特にリベラルアーツとの関係で、学部の壁を無くすというのは、やはり大変ではあるが、大事なことだと考えている。

ただ、本学は学科ごとに試験をしていて、学部よりもっと細分的な試験をしており、このことが、ある意味では、今まで専門性の高い人を輩出してきたという面において良いことであったと思うが、やはり、どうしても狭くなってしまうということもある。

本学は、文系のほうはある程度、例えば「グローバル文化学環」というものがあり、学科はどこであっても、他の学科の講義も受けられるということで、自由になってきているが、理系のほうは、この部分を何とかしたいと思っているのだが、なかなか大変である。

☆むしろ、理系のほうに積極的に取組んでいただきたいという意見は多くあった。それにより、今の入試の在り方そのものを、大きくチェンジさせることができないか、その一つの大きな要素になってもらえればと考えている。入試の在り方を変えていきたいという意味も、ここには含まれている。

★それは重要なことで、本学は、平成１９年度にＡＯ入試を初めて実施し、この入試は、誰でも入れるという易しいＡＯではなく、このような試験を受けて入ってきて欲しいという、ある意味では理想的な試験の形態を作った。

先生方には大変ご苦労をお掛けしたが、文系・理系を問わず、それこそ問題も、文系の人も理系の人も一緒になって、例えば先生の模擬講義を聞いてディスカッションする、あるいは、先生が問題を与えるということでも、例えば「確率」の問題などを、文系の人にも理系の人にも興味を持てるような形で先生が講義して、それについてディスカッションする。

★今年度は、講義を聞いてもらい、グループでディスカッションをし、最後は小論文を書いてもらった。「確率」という考え方について、文系と理系の講義をし、小論文を書いた。

★今回は第１回目であるので、先生方にも頑張っていただき、良い試験ができたと思っている。合格者は９名だが、全国にいる。昨年１２月の土曜日に、全員を集め、第１回目の研修を行った。

さらに、大学に入るまでにやるべきたくさんの宿題を出し、インターネットを通じて

質問を受け付け、担当の先生に回答してもらっている。語学など、かなりたくさんの量の宿題を課しているので、みなさんこれには相当びっくりしていた。

このねらいの１つとしては、２年生になってすぐに海外に出したいということがある。入学してから準備すると、なかなか時間が無く、３年生になってしまうと、就職など色々とあるので、入学前のこの半年を利用して、語学についてびっちりと勉強させ、入学したらすぐに、どこの大学に行こうかということを考えさせながら作業を進め、２年生の最初から行かせるということを考えており、実際、合格者はもうそのようなつもりで、自分はどこの大学に行きたいというようなことも、少しずつ決め始めているようである。

本当は、全員がこのような試験ができれば良いのだが、本学ではもう一つ、推薦入試もやっており、これにも非常に厳しい条件を付けている。いろいろなオリンピック、例えば、数学オリンピックや物理オリンピックなどに出た人、正確に言うと、少し言い方が正しくないかもしれないが、出場したことがあるとか、あるいは、挫折に絶対立ち直れる自信があるなど、ちょっと古めかしい条件が付いており、人物というか、そのようものをかなり重視している。もちろん、試験も小論文もあり、面接もやるので、かなり優秀な人が入ってくる。

全員にこのような試験をやれれば一番良いのだが、やはり限度があるので、今のところ、ＡＯ入試と推薦入試は、比較的理想に近い形での入学試験ができているのではないかと考えている。一般入試をこれからどのような形で良くしていくかは、非常に大きな課題だと考えている。

☆別の話題だが、専門教育というのは当然、大学院が中心になり、学部はむしろ教養教育が中心で、そのような流れの中、大学院教育における英語教育、英語の授業といったものを、５割から８割ぐらい行うというような、これもなかなか難しい話だが、やはり、大学院の国際化ということを考えると、それぐらいの一つの目標値があっても良いのではなかろうか。

そのために、逆に小学生から英語教育を、むしろコミュニケーションとしても、英語教育といったものを中心に行うべきではなかろうか。これは中教審あたりでも、十分にフォローをしてもらえると考えているが。

そのような方向について、本当に、現場から一つ、またご意見をお聞かせいただければと思うし、また、チャレンジできるものはチャレンジしていただければ、大変ありがたいと考えている。

（３）平成２０年度運営費交付金内示額の概要について

○学長より、平成２０年度運営費交付金内示額の概要について、【資料５】に基づき、平成１９年度よりも、総額として２．６％伸びたこと、政策課題対応経費として「文理

融合２１世紀型リベラルアーツの創成」が選定されたこと、法人化以降、本学の運営費交付金が順調に伸びている旨報告があった。

（４）平成１９年度補正予算（施設整備費補助金）内示の概要について

○学長より、平成１９年度補正予算（施設整備費補助金）内示の概要について、【資料６】に基づき、理学部１・２号館の耐震改修、附属高校校舎耐震改修、附属小学校体育館耐震改修事業として、約８億円弱の予算が認められた旨報告があった。

（５）科学技術振興調整費「若手研究者の自立的研究環境整備促進プログラム」
『挑戦する研究力と組織力を備えた若手育成』の特任助教の採用について

○学長より、科学技術振興調整費「若手研究者の自立的研究環境整備促進プログラム」『挑戦する研究力と組織力を備えた若手育成』の特任助教の採用について、【資料７】に基づき、国際公募の結果、特任助教９名を採用した旨報告があった。

（６）学長戦略人事について

○学長より、学長戦略人事について、【資料８】に基づき、公募の結果、生命情報学分野において、１名を教授として採用した旨報告があった。

（７）競争的資金等の受入状況について

○国際・研究機構長より、競争的資金等の受入状況について、【資料９】に基づき、平成２０年１月１５日現在の受入状況について報告があった。

（８）本学における最近の主な活動について

○学長より、本学における最近の主な活動について、【資料１０】に基づき、羽入副学長が「国家公務員倫理審査委員」に任命されたこと、北島佐知子准教授が、日本国際賞の「情報通信の理論と技術」分野において研究助成の対象となったこと、上川大臣（少子化対策・男女共同参画）が、本学のライフ・ワーク・バランスの取組みを視察されたこと、本学４建造物が有形文化財に登録されることとなったこと等の報告があった。

４．審議事項

（１）役職員の給与支給基準の見直しについて

○総務機構長より、役職員の給与支給基準の見直しについて、【資料１１】に基づき、昨年１１月３０日に成立した「一般職の職員の給与に関する法律等の一部を改正する法律」を踏まえ、本学の給与支給基準を見直し、給与規程を改正する旨説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

（２）平成２０年度学内予算編成方針(案)について

○学長より、平成２０年度学内予算編成方針(案)について、【資料１２】に基づき、基本方針としては、平成１８・１９年度の方針を踏襲すること、平成２０年度における重点事項としては、①「教育研究環境整備プロジェクト」に基づき、学長裁量経費および目的積立金の一部を財源とした、学内環境の重点的・効果的整備として、a)学生食堂の増築・改修、b)ユビキタスコンピューティング実験住宅の建設、c)若手研究者育成を目的とする研究室の整備、d)その他軽微な環境整備、②科研費の間接経費収入の一部を財源とした、学術図書・雑誌(電子ジャーナル含む)の充実、③施設整備費補助金事業の採択結果を踏まえた、附帯的経費の措置(移転費および設備費等含む)、④外部資金の間接経費収入の一部を用いた、専門教育に係る実験実習設備の自立的整備の４点を、編成方針に盛り込む旨説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

５．自由討議

■　主な議論は以下のとおり。≪☆学外委員からの意見、★大学側からの発言≫

☆入試の志願者の状況はどうか。昨年度に比べて、今年度の志願者はどんな状況か。

★まだこれからなので、把握はできていない。ただ、昨年度までは毎年増えていたので、今年度はどうなるのか、注目している。

☆２１世紀型のお茶大の経営、あるいは教学に対する戦略、こういうものにはマネーが掛かるということは当然であり、このことを踏まえ、色々と予算づくりをしながら組み込んで考えなければならないことは当然認識していると思うが、そういう中で、これからの、いわゆる寄附の問題、あるいは外部資金の導入、こういうことは大変重要な問題になってくると思うので、このようなことも含め、先ほど説明があった、総人件費改革の実行計画に伴う問題を見ていると、大変な時を迎えていくことになっていると思う。

その中で２つお伺いしたいのだが、これは非常に原始的な質問で恐縮であるが、学生納付金、これは手数料も含め、先ほど志願者の状況はどうなのかという質問もあったが、常識的に考えれば、これから若干低減してくるのではないか。

いわゆる、１８歳人口の減少問題が、今問われているわけだが、お茶大のように有名校であり、人気の高い大学はそうでないことも考えられるが、常識的に考えれば、若干減っていく。そのようなことも加味し、学生納付金や手数料、こういうものを含めた形での総人件費比率というか、学生納付金に対する、業務費等も含めての総人件費比率の問題。このことは、戦略上の問題として、お茶大はどの位の所に位置付けて考えているのか。

２つ目として、国立大学では声が出ているか出ていないかは分からないが、先ほどの人件費の話を聞いていると、当然、どこかで学資の調整をやることがあるのかどうか。授業料を下げて、違う収入を求める方法もあるし、あるいは、これではやりきれないということで、教育関係経費、教育の充実のため、アップ調整をしなければならないような時期が来るのではないかという気がしているので、この点についてもお答えいただきたい。

★今のところ、授業料は、プラスマイナス２０パーセントまでは増減を許されているので、その範囲で、増やすのか減らすのかのチョイスはできる。

ただ本学は、入学生のアンケートなどを見ると、授業料が安いということが、本学を選んだ理由のかなりのウェートを占めている。

一方では、都内に住んでいる受験生は、本学か、慶応・早稲田というように、二股を掛け、慶応・早稲田に受かると、そちらに行ってしまうということもある。その辺りで、地方の人は結構、学費というものに対して、本学が安い学費だということは、重要なファクターなのではないかという分析をしている。では、地方の人が減ってもいいのか、慶応・早稲田よりお茶大が良いと言ってもらえることができるか、そのあたりを考えないといけないと考えている。

１点目の質問は、まさに、そのことを次期中期計画に向かって考えていかなければならない。先ほど私は、外部競争資金で任期付きを雇えばいいと申し上げたが、このことは、外部資金を獲得できれば言えるが、獲得できなければ言えないので、ある意味では、最低限の規模、学生にここまでしなければ本学はやっていけない、という見通しを付けた上で、外部資金を常に取れるということである。良くて５年任期だと思うが、そのような先生を、しかしながら、きちんと教育をやってくださる立派な方を採用する。

これからは、おそらく本当は、それでは危ない、良くないことなのだが、ある程度の割合は、そういう先生に教育も研究もお願いするということを、やって行かざるを得ないと考えている。そのパーセンテージ、あまりにもそのような先生が多かったら、いったい何の大学なのか、ずっとこの大学で、それこそ、先ほどテニュアということを申し

上げたが、一生居ていただく先生、そういう先生は、ある意味では、もう評価は無いものである。そういう先生の割合をどれだけにするか、ということと関わっているので、まさに私どもが、この１年間を掛けて考えていかなければならない問題が、そこにあると思っている。

☆そういう意味では、大変大きな経営課題を抱えることになるので、大事な年度を迎えることになると強く感じる。

☆今のご指摘は、私も本当にそう思った。やはり国のしていることが、ものすごく矛盾が大きい。だから、これから先は一体どうなるのだろうかと。

けれども、この大学に任されている自由裁量の部分というのが、何かすごく見えないというか、少ない。そのような財政的な面で。だから、やはりこれからは、このことが一番大きな課題になるだろうと思った。

また、やはり学生が、どれだけこの大学を志願してくれるのかということ、どれだけここに定着してくれるのかということも、併せて、非常に大きな課題となってくる。

リベラルアーツ教育にシフトしてきたことは、私は上手くいっていると思う。国もそれを評価してくれているわけだが、受験生の層に、そのことがどの程度浸透しているのか、手応えで結構だが、教えていただきたい。

★先ほどの受験生の動向と含めて回答したい。本試験は２月６日が締切なので、データは無いのだが､既に終わったＡＯ入試については､１０月の経営協議会でご報告したが、募集１０名に対して、９９名の志願者があった。１０倍の倍率である。

それから、推薦入試を３学部で１１月に実施したが、今年度は定員８４名に対して３９５名､平均倍率で４．７倍｡昨年度が３５５名だったので､1割強の増加になっている。

このような状況から見る限り、本学の教育内容というか、あるいは、取っている方向性について、受験生は支持してくれていると理解している。

ただ、前期・後期の一般入試の方は併願ができない。推薦入試やＡＯ入試は併願ができるが、一般入試はできないので、これは少し「株」のようなところがあり、人気が上がり過ぎると翌年は落ちてしまうという、隔年現象というようなこともある。これは私大と違って、長期的に一般入試の方で受験生をたくさん集めるということは、今の国立大学のシステムではちょっと無理だろうと思う。あるところで絶対に止まってしまうと考えている。

よって、質的に教育内容を維持していくということはもちろんだが、そのことが受験料収入に大きくつながるかというと、ちょっと私大とはシステムが違うのではないか考えている。

２番目のリベラルアーツ教育への反応ということだが、実は先週の水曜日に、「２０年

度、お茶大の教育がこう変わります」という内容のホームページを、ちょうどセンター試験の後に出すと意味があるので掲載し、リベラルアーツのページも一緒にオープンした。また、先ほどのキャリアカフェのページも含め、全部リンクするようにし、受験生がその情報を得られるようにしている。

受験生の手応えは、これはもう少し先にならないと分からないのだが、ＡＯ入試、推薦入試の願書などを見ると、もちろん好感を持って受け止められているし、昨年７月の大学見学会の時も、学長サロンの時も、このような文理を問わない勉強をしたいという生の声もあったので、一定の成果は上がっていると考えている。

ただ、前回の経営協議会の時にも、教養教育というのは、教養が下にあって、専門が上にあるのかという質問があったが、今考えているのは、平行して、つまりリベラルアーツを強めることによって専門力も強めるというように設計しており、どちらかではないというのが、お茶大の特長であると考えている。

☆先ほどのお話で、今後の人件費の見通しというのは大変厳しいと思ったのだが、同時に、外部資金の調達状況などを見ていると、「お茶大って結構、スゴ腕かも」という感じもして、素晴らしいと思った。

拝見していて、公募の研究者の方が、例えば子育てとの両立が可能というのは、とても良いモチベーションを女子大ならではで作っていて、これが継続したら素晴らしいと思った。

今は主に、大学院に進んで研究者になるコースのようなものが皆さんの頭にあって、色々とお話をしていただいたと思うのだが、実は学部卒で就職する人も多いのでは。お茶大に進学する子供を持っている親御さんにしてみれば、このことに非常にセンシティブになっていて、どの大学を出たらどの程度の職に就けるのか、特に女子の場合も、昔はちょっとお嫁にいければ良いぐらいだったが、とても今はそうじゃない。これだけの時間と資金を投入したら、うちの娘はどれだけの就職ができるのかということは、皆さんとても気にしている。

そのような点において、今のお茶大の学部卒の学生の就職状況をお聞かせ願いたい。就職率といった時に、就職希望者のうち何割、というような言い方をしても、実際には、無理だと考えて、途中であきらめてしまうとか、大変失礼だが、デモシカで大学院に行くといった例も無いでわけではないと聞いているので、その部分の数字と、それから、先生方の実質的な感触として、ちゃんと就職しているのかということを教えていただきたい。

★ご指摘の通りで、就職を希望した人の中の何パーセントというようになっているので、就職でも進学でもない割合としては、大ざっぱだが、およそ１０パーセント位はいる。うまくいかなかったので、就職とは別の道を選ぶと。よくあるタイプは、もう１度他大

学を受けるとか、そういった形での数字が、やはり１０パーセント位見えない部分がある。

それから、もう一つ、これはアンケートで分かったのだが、１年生に対してずっとアンケートを取っており、１０年後の将来像ということを聞くと、イメージできない。様々な職を並べているのだが、イメージができない。これを非キャリア志向というのか、分析をしていると、そのような層がやはり出てくる。これも１０パーセント位はいる。

よって、そのような人たちがいるという前提で、これから考えていかなければいけないと考えており、先ほどのキャリア教育もそうだが、以前からお話している「お茶の水女子大学論」もそうである。１年次に入った時、自分がどのような将来を選んで、そのためにはどんな勉強をし、あるいは、どんな社会活動をしていくのかということをやっていかないと、この１０パーセントが拡大してしまうと考えている。

よって、これからの３本柱と私は申し上げているのだが、「リベラルアーツ教育」、それから「専門教育」、もう一つは「キャリア教育」と、この３本目が今のところまだ弱い。今動き出しているところだが、これをより強めていくことで、前２者を活かせる道を作っていく必要があるのではないかと考えている。

☆逆に、産業サイドから見ると、お茶大の学生が欲しいという声が、やはり非常に多いと思う。

しかし、卒業生の数の問題もあるだろうし、また、学生の希望の問題もあるだろうし、マッチングしない点はたくさんあると思うが、いくらお願いしても、うちにはよこしてくれないというお話を、私は数社から耳にしている。そのような所には積極的に回してやるから、そのような会社を教えろということであれば、申し上げたいと思うくらいである。このような現象も出ているということである。

★マッチングの問題に関しては、本学にはこういう所からお申し込みがあります、こういう科目で、こういうものを勉強したら、こういう方面に行けますというようなことを、やはりもう少し早い時期からやっていくべきであると考えている。

☆一つお願いしたいのは、そのようなニーズが高いということにかこつけて、３年生くらいで、既に再来年の希望先を決めてしまうということは、なるべくしない方が良いという気もする。

★今の点に関しては、毎年秋に、企業研究会を開催しており、１回に１０社ほど来ていただいている。

ただやはり、ゼロのブースが出てしまう。本当に来ていただいて申し訳ないのだが、食わず嫌いという言葉は悪いのだが、もう少し細かく見て、実は非常に良い会社がある

ということを、もっと知って欲しいという思いはある。

☆大学の戦略としては、うちの卒業生をどういう方面に出して活動をさせたいか、あるいは活躍をさせたいかという考えを、やはり持っているとは思うのだが、その点はどうか。

★今までは、どうもあまりそういうことが無かったように思う。
つまり、学生さんが自分で就職をしていく。私が見る限りなので間違っているかもしれないが、ほとんど先生方は、就職活動にあまり手を貸していらっしゃらない。これは印象なので、もし間違っていたら反論をお願いしたいのだが、学生に任せておけば本人が決めていく、という傾向が強かったというのが、私の感じ、受け取り方である。

☆今までの傾向で色々と感じるのは、多くの大学がそうであろうが、有名大学は、一流の企業に自分たちの学生を送り込まないと満足できない、ということにつながっていると思う。
　そういう発想を学生には持たせず、セカンド・クラスでもいいから、お茶大の学生が就職をし、バックとなって、より個性的に大学をアピールする。色々な仕事ができる分野というものは非常にたくさんあると思う。
　一流の企業に行って歯車になるよりも、セカンド・クラスの有名な、いわゆる研究開発を中心とした、あるいは、それに準ずるような、非常に個性的な会社もある。
　やはり、そういう中に飛び込んで行って仕事をしてもらった方が、本人のためにもなるし、大学のためにもなるという気がする。そのような指導は、大いにしていただいた方が良い。

★むしろ本学は、有名企業にたくさん行くということがあまりなく、皆一人ずつ色々なところに行っている。それは、先ほど申し上げたこととは逆で、先生方は何も世話をしないのだが、特に大手のところへ行くということはあまりない。そこは、本学に非常に特徴的である。

☆それは良い方向である。お茶大であれば、皆一流のところを受験し、就職をすると考えていたが、それは結構なことである。

★先ほどのご質問の最初のところで、お茶大も大したものじゃないかと、外部資金をたくさん取っているというのは。先ほどの棒グラフを見ていただくとその通りなのだが、総人件費改革との関係で言うと、運営費交付金の基礎部分で雇用している人間が、ここを越えてはいけない。

よって、外部資金は、今は２２億８千万円なので、大体授業料収入と同じぐらい取っている。しかし、ここで基礎部分の人の雇用ができない。よって、総人件費改革というのはここがネックで、今は総額としては結構持っているのだが、しかし削減せざるを得ない、ということになっている。

よって、国立大学というのは、そういう微妙な、色々な制約の中で生きろと言われている存在だということを、ここでもアピールしたい。

☆そうすると、もしこのままいけば、永久に下がっていくのか。何年で国立大学というのは破綻するのか。そういうシミュレーションはできているのか。

★何年か前にお出ししたシミュレーションがあるが、これはもはや、政策の方が何を狙っているのかという、受け止め方になってしまう。文科省に限らず、財務当局などが何を狙っているかということを考えるか、あるいは、もう最後まで頑張って、未来永劫右下がりのままであれば、これはもうアウトなわけである。

☆どのくらいの人件費を削減しながら、国との間でその限界点がどこなのかということをシミュレーションしながら、運営をしなければならないというわけか。

★学長も、ご自身のお考えで、安易な合併など、そのようなことはすべきでないと考えていらっしゃる。

しかしながら、政策の誘導というか、そういうところを目指しているのであれば、大学として、どこかで手を打たなければならないというのは、当然あるところである。

☆大学のビジョン、意見というものを、どう打ち出しながら大学のブランドを上げていくか、そういうことかもしれない。

☆そのような論理でいくと、お茶大を例に取れば、お茶大として、学長を中心としたインデペンデント、いわゆる教育であり、経営でありということについては、大変やりにくい枠組みの中で運営せざるを得ないということなので、これは大変おかしな話だと思う。

なぜ大学が法人化したのかという原点に戻って、やはり議論をさせてもらいたいような問題が出てくる。

★様々な矛盾がある中で、今はもう、工夫を、工夫をということである。

☆学長は大変やりにくくてしようがない。全てにたがをはめられているということで。

これだけ箸の上げ下ろしをされていたのでは、とてもじゃないが経営なんてできない、と途中で放り出すような学長も出てくるのではないかと思ってしまうような雰囲気である。

☆その点は、教育再生会議でも大変重要な議論の対象になっている。今回は出していないが、そのような問題点はどんどんご指摘いただければと思う。矛盾に満ちていることが非常に多い。

☆再生会議あたりでがんがんやってもらわないと、とてもこれは直らない。

★第四次報告というのものがあれば、そこで是非、よろしくお願いしたい。これはどこでも同じことだが、なかなか声が届かないという、もどかしさがある。これからまたお世話になるが、どうぞよろしくお願いしたい。

６．次回開催は、平成２０年３月１０日(月)１５時からであることを確認した。

以　　上